

新型コロナウイルス感染症対策のため、当分の間『岐大通』の配布方法はこれまでと異なります。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

2020J3 ■順位表■第5節

勝点、得失点差、得点、失点、岐阜戦の戦績（岐阜から見て）

1	秋田	15p	+10	10	0	
2	鳥取	12p	+4	9	5	AO
	熊本	12p	+4	10	6	HO
4	相模原	9p	+2	5	3	
5	今治	8p	+3	5	2	H△
6	長野	8p	+2	6	4	
7	岐阜	8p	0	5	5	---
8	藤枝	7p	+3	12	9	
9	富山	7p	+2	9	7	
10	鹿児島	7p	+1	9	8	
11	沼津	7p	-1	5	6	
12	八戸	6p	-2	5	7	
13	福島	5p	-1	5	6	
14	C阪23	4p	-2	5	7	A●
15	YS横浜	4p	-4	8	12	
	G阪23	4p	-4	6	10	
17	讃岐	1p	-6	3	9	H△
18	岩手	1p	-11	3	14	

※勝点、得失点差が同じ時は同順位とし、リーグ戦終了時に直接対決結果で決定（H&A実施完了時のみ）

次回HomeGame

第9節 vs.いわてグルージャ盛岡

8/8(土) 18:00

@岐阜メモリアルセンター

長良川競技場

大酒場 ホームラン

名鉄岐阜駅前（三菱UFJ銀行隣り）
年中無休 午後3時から営業

TEL.058-263-5201

「いらっしやませ」より
「おかえりなさい」が似合う
アットホームな韓国料理店。

『チヂミ屋』は
JR岐阜・名鉄岐阜駅から徒歩3分。
休:月曜日

today's guest : ガンバ大阪U-23

2019 J3 9勝8分17敗 勝ち点35:17位

直近の対決と結果

初顔合わせ

ここ3試合の公式戦の結果

FC岐阜	ガンバ大阪U-23
2020/07/19 J3-05節@長良川 岐阜 1-0 熊本	2020/07/19 J3-05節@パナスタ G阪23 2-4 鹿児島
2020/07/15 J3-04節@ヤンマー C阪23 2-0 岐阜	2020/07/15 J3-04節@えがおS 熊本 1-0 G阪23
2020/07/11 J3-03節@長良川 岐阜 1-1 讃岐	2020/07/12 J3-03節@パナスタ G阪23 1-3 鳥取

ガンバ大阪U-23:

2016(平成28)シーズンからJ3リーグにJ1、J2クラブの23歳以下の選手(U-23)で構成されたチームが参加することとなり、制度開始初年度からJ3に参戦している。なお、この「U-23チームのJ3リーグ参戦」については、試合エントリーメンバーのうち3名(GKは別に1名)までオーバーエイジ選手の登録が認められており、かつてFC東京に所属していた現・FC岐阜の前田遼一はFC東京U-23の試合に出場し、10試合で3得点。(吉田鑄造)

●中3日での3連戦・3戦目。これまでの2試合を1分1敗とし、7/19(日)第5節・ホームに熊本を迎えたFC岐阜。大木監督率いる開幕4連勝中の熊本は、試合序盤からボールを支配して岐阜のゴールに迫る。その熊本の攻撃を、粘り強い守備で跳ね返し続ける岐阜。後半も熊本のペースで試合が進むが、徐々に岐阜にも攻撃の機会がやってくる。しかし決めきれずに、このまま試合が終わるかと思えた試合終了直前、ロングカウンターでGKと1対1になった#10川西翔太がシュート。そのセカンドボールを拾った#28永島悠史が値千金のゴール。これが決勝点となり、1-0で熊本に勝つことができた。この勝利の結果、FC岐阜の順位は10位から7位に上昇。しかし、2位タイの鳥取・熊本とは勝ち点差4、首位の秋田とは勝ち点差7。まだまだ「J3優勝争いをしていない」とは言えないし、優勝争いをするためには勝ち続けなくてはならない。その優勝争いが『3試合で2勝』ラインだとすると、この第6節で岐阜が連勝しても勝ち点11であり、届いていない。まだ先の長いリーグ戦だが、常に勝利への執念と緊張感をもって戦い続けなければ、優勝への道は閉ざされてしまうだろう。

さて、今節の対戦相手はガンバ大阪U-23。言わずと知れたJ1・G大阪が東京五輪を見据えて若手選手を育成するために結成しているチームだ。基本的にはトップチームで出場機会の乏しい若手選手とユース選手主体のチームで、選手育成を主眼に置いているためかチームの完成度は低い。個々の技術は優れている上、オーバーエイジ枠が3名分あり、#20高木大輔が今季4試合に出場するなど、トップレベルの選手も出場する。試合によって戦力が大きく変わるため、全く油断がならないチームだ。現在は守備の課題を抱えて3連敗中で15位に沈んでいるが、開幕戦では讃岐を3-2と実に「ガンバラしい」攻撃的なサッカーで勝利を収めている。G大阪U-23の要注意選手は、前節・鹿児島戦で2得点、現在3得点を挙げて独り気を吐いている、生粋のガンバ育ちであるFW #38唐山翔自。また、キャプテンマークを巻く#23市丸瑞希と、CBの柱である#28タビナス・ジェファーソンの両名は、昨季は岐阜に在籍していた選手だ。両選手とも「里帰り」に気持ちが入っていることだろうが、彼らを上回る気迫を見せたプレーを、岐阜の選手たちには見せて貰いたい。また、G大阪トップチームとは、彼らが唯一J2にいた2013年に対戦しているが、5/3(金)アウェイ第12節は0-2で、7/3(水)ホーム第22節は2-8で敗れている。なお、ガンバが岐阜から奪った最後の得点者は(現在は岐阜の)#10川西翔太だった。ガンバの「先輩」として、今節の#10川西には「後輩」を圧倒する活躍を期待したい。

連勝を掴み取るために、僕らFC岐阜サポーターも、限られた手段の中で、選手たちに精一杯の応援をしよう。タオマフ・ゲーフラの掲出(振るのは禁止)、試合中の拍手(手拍子は禁止)や(声を出さない)身振り手振り等で、選手たちの背中を後押ししよう。ここで連勝を掴み取り、これから優勝戦線に名乗りを上げるための反撃の狼煙としよう。(ささたく)

投稿募集!! gidaidohri@gmail.com

【第5節】岐阜 1-0 熊本

●昨シーズン途中まで岐阜を指揮した大木監督との対戦、過去ホーム長良川ではほとんど勝てない上に開幕4連勝中で絶好調の同期熊本との一戦。ここで万が一にも負けてしまうと嫌な流れに飲み込まれそうな大事な戦いとなった第5節をなんと現地ではなくD A Z N観戦するという緩さ加減にお付き合い出来る方のみこの先を読み進めてください(笑)。

試合開始早々から適度な距離感でパスを繋ぎまくり、セカンドボールも拾いまくってポゼッション率80%を稼ぐ勢いでボールを保持し、タッチラインぎりぎりに張った選手にボールを預け、DFを開いて崩そうとしてくるまさに「大木サッカー」を展開。「あーこれこれ」という既視感と、岐阜の時よりも少しテンポアップした感じのパス回し(戦術落とし込みの違いか、選手スキルの違いかはわかりませんが……)を受け身のまま、けれどもなんとか無失点で前半終了。

試合後の熊本側選手コメントで「相手がこんなに引くとは思って無かった」とあったように、ボールに食いつき過ぎずに適度にフリーで持たせてた(「持たれてた」とか言わないで(笑))事が大きく崩されずに済んだのか、まさに大木岐阜時代の最大の課題「引いた相手を崩しきれない案件」が発動。だんだん受け手のペースになったところでカウンター一閃! FC岐阜先制という、まさに昨シーズンまでの悪夢の展開が逆の立場で起きました。

高崎、前田両選手の献身的なプレーをはじめDF陣の紙一重の守備による0封、川西選手の神トラップからのシュート、そのこぼれ球を大木監督が京都から呼び寄せた永島選手が決勝ゴールを決めるというドラマみたいな展開で勝利。なんとか昇格戦線に踏みとどまった長良川決戦でした。守備の決まり事の落とし込みやその他課題はまだまだ山積な気はしますが、まずは次節まで勝利の余韻に浸りましょう。(秀麻呂)

●対戦相手は開幕4連勝中と好調の“J同期”熊本。そして、その監督が昨季途中まで岐阜を2年半指揮していた大木監督。また、熊本は今年の豪雨でも大きな被害を受けた地域。僕の中でも様々な感情が複雑に入り乱れていたし、多くの人たちがそうだったろう。そして、『だけど(だからこそ)勝ちたい』とも。第5節にして、今季リーグ戦の最初になるヤマ場の試合。数日前までの雨予報が、当日は真夏のような蒸し暑さに。試合直前に少し雨が降って気温が下がったけれど、まだ暑さに慣れていない身体での3連戦目。選手たちには相当に厳しい試合になるだろうと僕には思えた。ショートパス主体のサッカーに大きなサイドチェンジや縦へのロングボールを交えて岐阜のゴールに迫る熊本。岐阜の1年目はシシーニョや庄司がサイド展開してたっけ。つまり、調子の良い時の“大木サッカー”。しかし、岐阜の選手たちは昨年までとは違うサッカーで、昨年までの“自分たち”に立ち向かい、粘り強く集中した守備で、熊本にゴールを割らせない。とはいえ、一般的には守備の方が疲労が激しいと言われている。

後半も、やはり序盤はボールを支配して攻撃を続ける熊本に対して、身体を張って守る岐阜。その流れが変わったのは……たぶん後半63分に一気に3枚替えをしてからじゃないかな?前線でのプレスを増していく岐阜。徐々にサイドチェンジや縦へのロングボールが影を潜め、足が止まりはじめ、ショートパスに頼るようになってゆく熊本。これは……なんだか既視感があるサッカー?(苦笑)。徐々に岐阜のカウンター攻撃が機能し始めるけれど、あと一歩決めきれない。このままドローで終わるのか、いや終われるのか?と思い始めた後半44分。一気にロングカウンター。熊本のDFラインを抜け出した#10川西翔太が見事なトラップでGKと1対1になり、シュート。これはGKに弾かれたものの、そのセカンドボールを#28永島悠史が拾い、1フェイク入れた後に冷静にゴール隅に叩き込む見事なシュート!そりゃあ思わず叫んじゃうよね(苦笑)。試合終了の笛、そして沸き上がる歓喜の叫び。今季ホーム初勝利!!ホームでの勝利は昨年10/20(日)第37節・愛媛戦以来。そしてホームで熊本に勝ったのは…なんと2009年5/24(日)第17節[1-0]以来!?!長かった……(苦笑)ボール支配率は熊本が圧倒的に上回ったけれど、撃ったシュート数はカウンターの岐阜の方が上。典型的な『大木サッカーの攻略法』を実践できたかなと思う。個人的に特筆すべきは、#11前田

遼一のお手本となるポストプレーと鬼プレス。大ベテランにあれをやらされては、他の選手も最後まで必死に走らざるを得ないよね(笑)。そして#8中島賢星、キミなんか吸ったかい?(笑)。背番号をヒトケタに変えて、性格まで変わったような(笑)、良いプレーをするようになったと思う。これは#6三島頌平にも感じます。そして3連戦目で足が止まるかと心配したけれど、それほど止まらなかった岐阜の選手たち。今季から導入のフィジカルトレーニングの成果が出ているのかな?今季は3連戦が8回もあるから、こういった面も重要になると思う。(ささたく)

●長良川劇場が帰ってきた!耐えに耐えたアディショナルタイム突入直前に訪れた歓喜。縦ボンの浮き球をサクッとトラップした10番も見事なら、決勝ゴールを決めた28番のシュート・フェイク。あのワンプレーで勝負ありだった。

それにしても、厳しいシーズンになるとは予想していたが、まさか、開幕して4節で剣が峰に立たされるとは思わなかった。この試合に敗れると権利持ちの上位2クラブ(秋田、熊本)から大きく水を掛けられることになる。そして、当面の敵は開幕4連勝、リーグ有数の得点力を誇る熊本。仲間からの情報で知ったのだが、長良川で最後に熊本に勝ったのは2009年だと。前世紀かよ(違います)。アウェイではいい勝負しているから気がつかなかったのかな?なんて思っていたら通産戦績は6勝11敗7分け。圧倒されてるやん!しかも、そんな熊本を率いるのは『特殊だけど落とし込みの早い戦術』を駆使する元岐阜の指揮官・大木武氏である。まさに、難敵中の難敵。こんな早い時期に当たりたくなかった、というのが正直な思い。案の定、開始早々から守勢一方。決定機も何度かあった。胃がキリキリとなる状況の中で、不思議なことに余裕が徐々に膨らんでいく。ヘンな言い回しだが『昔、よく見た展開に似てる試合だな。』と覚えて仕方がなかった。ここ数年、特に昨季によく見ていた光景だった(苦笑)。

しかも、向こうにはキョーゴがいない。後半が始まると、予想以上に早く熊本が失速。しかし、ウチもチャンスを生かせない。勝ち点1でも良しとするか?と思い始めたところでの電光石火的な決勝点。ゴール後に選手もスタッフも歓喜に浸っているシーンはいつ以来のことだろう?前田神がセンターサークルにいてくれてよかった(笑)。とりあえず、ミッションは達成。内容には思うところがあるものの、首は厚めの皮を残したままで次節以降に臨むことができる。しかし、果たして、今のままでいいのか。今後の伸びしろはあるのか、熟成されていくのか。フロントの目標が公言通りなら、次善策と介錯用の刀は準備しておく必要もあるんじゃないかな?いや、ホントにタフな試合でした。(ぐん)

●とても見慣れた光景だった。両チームのユニを入れ替えれば、それは3年前から昨年途中まで長良川で見慣れた展開のサッカー。後半30分過ぎくらいからは「ああ、そうだよ。こうだった。こうだったんだ」と思いながら、試合を観ていた。

前半は岐阜の左サイドに盛んに長いパスを通して起点を作られ、「どうなっちゃうんだ」と不安でいっぱい。この時間帯に失点していたら試合の様相は変わっていただろう。しかし、岐阜の守備陣は、今季のこれまでの失点シーンのような中途半端なクリアでピンチを広げることもなく、しっかりと対応していた。

事態が変わったのは、高崎→前田の交代。前線に入ったボールが活きた形で味方に渡ることが増え、さらに先に書いたように熊本の中盤が止まって競ったボールを拾えるように。(以前の長良川・岐阜がそうだったように)攻め切る以外に手がない熊本はチーム全体が前がかりになり、そこへカウンター。ようやくの先制ゴール。負けてしまえば第5節にして「今季もご声援ありがとうございました」になりかねない試合で、勝ち点3を得ることが出来た。FC岐阜は、C大阪U-23戦での手痛い敗戦をちゃんと薬にしたようで、DFがセーフティ優先の選択をすることが多かった。この選択を根気よく続けていけるなら、守備が大きく破綻することはないように思える。問題は、やはり攻撃。相手の動きが落ちるまで耐え、時が来たら物理で殴る。でも、物理で殴れない相手に対しての「プランB」は持っているのだろうか。いまのところ、物理で殴れない時には「さらに物理で殴る」という展開しか目にしていない。その点で、わずかな時間の出場だったけれど、町田ブライトのプレーには注目したい。相手DFをずるずると引きずりながらの力強いドリブルは、制空権が握れない時の地上戦では、いいアクセントになりそう。(吉田铸造)